

## 中世和文体の特色について

—擬古文の敬語を中心に—

勝 山 幸 人

一

中世王朝物語の表現を文章史の観点から捕捉すると、一言で言えば、平安中期の和文体に擬えようとした擬古文と位置づけられるだろう。だが、擬古文とはもともと江戸時代の国学者が、その和文体に文章としての模範を見出して作り上げた知的文体に他ならないが、そういう意味でなら、王朝風を装おうとした中世王朝物語もまた擬古文であると言って間違いではない。日常の話し言葉をもとにして流麗な平仮名を使い、自由に創作できた時代と違って、鎌倉時代の物語作家たちは、中古の語彙や語法を知識として、あるいは教養として身につけておかなければならなかった。そこには模倣であるが故の歪曲

も誤解もあつただろう。だが歪曲された用例をいちいち挙げて、それらを否定的に云々することは、あまり意味を持つものではないと思う。我々の関心は、文語と化して命脈を保っていた平安中期の和文体の、特にその文章様式の骨格をなす敬語表現が個々の作品中に具体的にどのような取り込まれているかと言う点に向けられるのである。それは和文体を歴史的に観た場合の中世の文語研究——その各論としての擬古文の特色とも呼ぶうるものであるに違いない。

二

さて、いろいろな中世王朝物語の文章を読んでいて気がつくことだが、中古の語彙や表現の持つ細かい意味と

か用法差とかが失なわれ、十分に生かされていないのではないかと思われる場合が少なくない。一言で言えば、表現の平均化と言つてよいだろう。

例えば、尊敬語の「御覧す」「見給ふ」、「思す」「思し召す」「思ひ給ふ」「思はせ給ふ」、「宣ふ」「宣はす」、「おはす」「いますがり」「おはします」、それに補助動詞の「給ふ」「せ給ふ」「させ給ふ」——これらのバラエティに富んだ尊敬表現は、登場人物相互の序列関係等によつて微妙に使い分けられていたものだが、擬古文においては、その用法上の差はないと言つてよい。まったく同一人物の同じ場面であっても、いくつかの尊敬表現があつて、それらは同じ程度の敬語として取り込まれているのである。

謙讓語にしても、補助動詞「奉る」と「聞こゆ」に認められた上接語との親疎関係での対立——例えば「見る」「聞く」などの直接的な動作を含む知覚動詞や助動詞「る」「らる」「す」「さす」は「奉る」が、「見る」「頼む」「語る」などの精神活動を表わす動詞には「聞こゆ」がつくと言つた、中古語一般に見られる特性は指摘できない。「聞こゆ」に対する最高敬語「聞こえさす」も同じ程度の敬語と言つて平均化して、その差はないもの

など、「申されけるは」「申されければ」と言う、独特の形式の中で使われている。会話が相互に緊密に絡み合うことではないばかりか、極端な場合には「申す」の「言う」意味だけを残しておいて、敬意の方向は聞き手から動作の主体へと転換される場合すらありえる。二番目に挙げたのがそのいい例であろう。身分の上の大納言が格下の大将に「申す」と言つて、その大納言には最低敬語の助動詞「る」で済ませている。言うまでもなくそれは歪曲に他ならない。結局、擬古文の「申さる」は「宣ふ」や「宣はす」と共に同じ程度の敬語となつて平均化してゆくと考えられよう。

概ね十一世紀後半を境にその地位を「参らす」に譲り、急速に衰退してゆく「聞こゆ」「聞こえさす」を積極的に取り込もうとする点で平安中期の雰囲気はよく出ていると言えるが、一方「奉る」「聞こゆ」「聞こえさす」「申す」が平均化してゆく姿は、擬古文の大きな特色の一つと位置づけられるに違いない。

### 三

ところで、この平均化に対して形式的、つまり中古の

と認められる。例えば『苔の衣』の若宮を残して中君が  
他界する場面の、

ついに消へはて給ひぬれば尼君ぞよろづに泣くく  
後の事なんども扱ひ聞こへける。若宮のかゝる所に  
おはすを、「いかにせまし」といたはしく見奉れど、  
渡し聞こゆべき方もなければ、忝けなくながら、か  
くて扱ひ奉る。 (『苔の衣』四)

がよい例であろう。この例を見る限り、「奉る」と「聞こゆ」について対立があるとかないとかと言つた問題ではもはやなく、単に交互に使つてに過ぎないと見るべきかもしれない。

「申す」は動作の客体に対して敬意が向けられる謙讓語と言うより、聞き手の支配下に入つて謹んで申し上げる格式ばつた、文字通り謙讓と呼ぶに相應しい語であつた。中世王朝物語でもこの「申す」は頻出する敬語の一つだが、そうした微妙なニュアンスを感じ取ることはできない。「申す」の多くは、地の文において、

母宮、〔中納言二〕申されければ、「我ながらん跡までも……」と申されければ、 (『住吉物語』二九五)  
大納言、〔大将二〕申されけるは、「申出づるにつけて……」と申されければ、 (『住吉物語』三四五)

語彙や表現を取り込む際の擬え方が形式的としか言いようがなく、実際の用例を検討すると平安中期のそれとはまったく異質であることが指摘できる。語彙の意味を曲解したり、「こそ」のない已然形結びを呈したりと言つ、かつて物語研究者によつて指摘されたことのある歪曲の大半は、おそらくこの形式化に属するものと思われるが、特にここで注意したいことの一つは、「御覧じ給ふ」「仰せられ給ふ」「おはし給ふ」「思し給ふ」「遣はし給ふ」「聞こえ奉る」「侍り候ふ」などの二重の敬語表現である。例は、

〔帝八〕さりともおろかにはもてなさせおはしまさ  
じと心安く思ひ侍り候ふ。 (『苔の衣』二)  
「このことを『かく』と聞こえ奉りてもかひあるべきことならず」 (『苔の衣』二)  
いづ方へ行くらんと夢路にまどふ心地しておはし着  
き給ふ。 (『しのびね』上)

北の方もおはして思し給ふにも、 (『小夜衣』中)  
等、枚挙にいとまない。このような表現は確かに『源氏物語』にも見出すことができる。

〔右近、私八〕かくあやしき身なれど、たゞ今の大殿 (源氏) になむ候ひ侍れば、……

〔源氏〕玉鬘

〔浮舟八〕なかなか言ふかひなき様を見え聞こえ奉らんはなほいとつつましくぞありける。

〔源氏〕手習

しかし、前の例の「候ふ」は謙讓語「伺候する」の意で、それを「侍り」が補助しているわけであって、擬古文のそれとは違う。後の「聞こゆ」も本動詞「聞かれる」ないしは「聞かせる」の意で、直上の「見られる」「見せる」意の「見ゆ」と併せて「奉る」が補助しているわけであって、これも擬古文とは異質である。この他にも、

〔春宮ハ藤壺ノ退出ヲ〕恨めしげに思したれど、さすがにえ慕ひ聞こえ給はぬをいとあはれと見奉り聞え給ふ。  
〔源氏〕袖

とあるが、これも「聞こゆ」は本動詞「申し上げる」意で、「あはれと」お見上げし、またその由を実際に申し上げましたと言う表現と見るべきであって、擬古文のそれとは本質的に異なるものなのである。今こうした中世の二重の敬語表現を桜井光昭は「雅語」と呼んで本来の敬語とは区別すべきことを言い、また根来司は「過当」と言う言葉を用いて、鎌倉時代の文語の最も特徴ある敬語表現と位置づけている点に注意しておきたい。敬語を重

もう一つ、姫君と同じく、男主人公と呼ばれる少将も時折、最高敬語の「せ給ふ」「させ給ふ」で待遇されることのある人物だが、極端な場合には少将に対してまったく敬語がつかない例すら認められるのである。

少将、その夜対に行きて、兵衛の佐といふ女して侍従を尋ねさすれば音もせず。〔佐ハ〕姫君の御跡に臥したるかど几帳を見るに、姫君もおはせざりけり。  
うち騒ぎて人々に尋ねさせけれども見えさせ給はざりければ、「あやし」と思ひけり。

〔住吉物語〕三二五

この例では、姫君には「おはす」「させ給ふ」とあつても少将には敬語が一つもないことがわかる。無敬語から最高敬語まで、もはや待遇意識と言うか、敬意の軽い・重いと言った認識はなかったものと言わざるをえない。

さて「給ふ」と「せ給ふ」「させ給ふ」が平均化するのと並行して、会話文の「思ふ」「見る」「聞く」につき話し手の謙讓、その補助動詞「給ふる」(下二段)との用法差は歪曲され、平安中期の文章として読むにはもはや理解しがたいものとなっている点も特色の一つと言えるだろう。二・三例を挙げるにとどめるが、

ねたからと言つても敬意がそれだけ強まるわけではなく、鎌倉時代の物語作家たちは中古の敬語を大雑把に理解して、これを形式的に並べることでその雰囲気を出そうとした結果がこうした例を生んだように思えるのである。

#### 四

形式的に關してもう一つ言うべきことは、何と言つても補助動詞「給ふ」が頻繁にと言うか、もはや乱用に近いほど使われていることである。尊敬の補助動詞「給ふ」は、一方で敬意を増した最高敬語「せ給ふ」「させ給ふ」を作り上げるが、ここでその差は認められない。既に述べた通り、平均化しているのである。試みに『住吉物語』の場合を見てみよう。ここで物語の全般にわたつて登場する女主人公たる姫君が侍従一人を残して帰邸しようとする場面を取り上げてみたいと思うが、

侍従をば置きて帰らせ給ふべきよし聞こゆれば帰り給ひにけり。  
〔住吉物語〕三一

とある。まったく同一人物の同じ文中でありながら「給ふ」「せ給ふ」が共起している姿は何と言つても興味深い。

かやうのことを(父大臣が)聞き給へましかば、いかにほひなく思さまし。  
〔苔の衣〕三・会

〔東院ノ上ハ〕いつき据へられ給うる女君の御有様など見給ふに、  
〔苔の衣〕三・地

聞く人も心も動きぬべく言ひ続け給ふれば、

〔小夜衣〕下・地

これらが「聞き給はましかば」「据ゑられ給ふ女君の」、そして「言ひ続け給へれば」とあるべきことは言うまでもない。

中世王朝物語の作家たちにとって、中古の「給ふ」はどんな動詞であつてもこれをさえつければ尊敬表現になる、都合のよい敬語であつた。で、それだけに取り込みやすかつた。「給ふ」と「せ給ふ」「させ給ふ」が平均化され、さらに歪曲された謙讓の「給ふる」と共に乱用される。こうした形式的な擬え方が中古らしさを醸し出すのと同時に、擬古文の特色をよく表わすことになったのだらうと考えられる。

#### 五

ところで、我々物語研究者は、しばしば物語の展開に

沿ってその筋だけを大雑把に要約して示すことがある。これは粗筋あらすじと呼ばれるが、粗筋は一貫した方法で順序立てて整理した梗概とは意味的にやや異なるものである。この粗筋や梗概自体はけしておもしろいと言ふものではない。なぜなら、そこには作家の言いたいことが見えていないからである。だが、読者はこれを手掛りにして、その物語を読んでみようと言ふ気にさせられるのである。実際に物語を読んで、自分なりに粗筋をつかみ、大意や主題を考える。そうした読者の読解過程にそのおもしろさは多分に委ねられているのである。

それにしても中世王朝物語の文章は本当に難しい。筋をつかむことすらしばしば困難を伴う。で、その割におもしろさと言う点に欠ける。なぜであろう。平安中期の文章を模倣しようとしてしきれなかった技術上の稚拙さとひどい歪曲と言って片付けられるものでなく、何かもつと構造的な根深い所に起因しているようではならぬ。中世王朝物語の文章研究は、まだ多くの問題を山積したままなのである。

27・7月

〔引用テキスト〕

『住吉物語』は『新 日本古典文学大系』（岩波書店 平1・5月）、『源氏物語』は『源氏物語大成』の本文による。『苔の衣』は実践女子大学・黒川真頼本により、他の『小夜衣』『しのびね』は『古典文庫』本によった。引用は読み易さを考え、私意により注・括弧・句読点を付けたり、漢字に改めたりした。ただし仮名遣いはそのままとしたので、表記上の問題がありそうな部分に私意は入っていない。

（本学人文学部助教授）

〔参考文献〕

- 勝山幸人「『苔の衣』の謙讓語補助動詞について」（『國學院大學院紀要』第18輯 昭62・3月）  
「中古における『申さる』という表現」（『山口国文』第13号 平2・3月）  
「『住吉物語』の敬語」（『國學院雜誌』第97巻4号 平8・4月）  
「和文体」形成の構想について」（『静岡大学人文論集』第49―1号 平10・7月）  
櫻井光昭「敬語論集―古代と現代―」（明治書院 昭58・4月）  
杉崎一雄「平安時代敬語法の研究―かしまりの語法とその周辺―」（有精堂 昭63・1月）  
根来 司「中世文語の研究」（笠間書院 昭58・4月）  
「源氏物語の敬語法」（明治書院 平3・12月）  
森野宗明「古代の敬語 II」（『講座国語史』5 敬語史）大修館書店 昭46・11月）  
和田利政「源氏物語の謙遜語―補助動詞『奉る』と『聞ゆ』について―」（『日本文学論究』第10号 昭